

ら立っておりました。

『あなたは、自分のことをなんてよぶんです?』子鹿はとうとう口をひらきました。なんてやさしい、かわいらしい声でしょう!

『それがわかればねえ!』と、アリスは思い、みじめな気持ちになりました。アリスは、すこししょんぼりして答えました。『なんとも。いまのところは。』

『よく考えなさいよ。』と、子鹿がいました。『それじゃあ、話にならない。』アリスは考えました。それでもなんにも思いつきません。『お願いだから、あなたのほうはご自分のことをなんてよぶのか、教えてくださいませんか?』アリスはおおずといました。『すこしは参考になると思うの。』

『お教えしましょう。もうすこしさきへ行ってからね。』と、子鹿はいました。『ここにいたんでは、思いだせないですよ。』

そこで、アリスと子鹿はそろって、森の中をどンドン歩いて行きました。アリスは、さもいとしげに、腕を子鹿のふんわりした首にまわしていました。とうとうべつ野原にでました。するとそこで、子鹿はいきなり空中にはねあがり、アリスの腕をふりほどいて自由になりました。『ぼくは子鹿だ!』子鹿は、うれしくてたまらないというふうに叫びました。『や、なんてことだ! あんたは人間の子どもじゃないか!』子鹿の美しい茶色の瞳に、ふっと警戒の色がひらめきました。そしてあっという間に、子鹿は、全速力で走り去ってしまいました……」

p. 156-158

- 2043 Dusko Popov 『ナチスの懐深く』 関口英男訳 (早川書房, 1978年, ハヤカワ文庫NF)

原題: Spy/Counterspy.

今度はどちらの世界も異常なものであるが、それを別にすれば、それは一つの世界から別の世界へと移ってゆく、不思議の国のアリスの経験といえよう。

p. 122

- 2044 Ellery Queen 『帝王死す』 大庭忠男訳 (早川書房, 1977年, ハヤカワ・ミステリ文庫)

原題: The King is Dead.

「白うさぎめ」エラリーはつぶやいた。「おお、私の耳とひげ! おそくなるばかりだ!」 (『不思議の国のアリス』の中のセリフ)

p. 221

- 2045 Albert Rosenfeld 『ラングミュア伝 ある企業研究者の生き方』 兵藤申一・兵藤雅子訳 (アグネ, 1978年)

原題: The Quintessence of Irving Langmuir.

この単純な装置を想像力を働かせながら様々に使うことにより、観察するラングミュアの眼の前には、不思議の国のアリスが見た、小走りに走りぬけるチョッキを着た白い兎のような、思いもかけぬ現象が現れてくるのであった。そしてその現象を彼が追ってゆくと、白兎を追って行ったアリスが穴の中にまっさかさまに落ちた時出会ったように、不思議なところへ彼は導かれるのであった。

p. 110-111